「"ガラス","雪","アイス"」

蒼月光華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三題話「”ガラス”，”雪”，”アイス”」

【Ｎコード】
Ｎ８６３８Ｌ

【作者名】
蒼月光華

【あらすじ】
三題話。
書いてみたので、載せてみたりした。
恋多き女のお話。

（前書き）

適当＋自己満足。
受け付けなかったら、帰ってください。
どうもすいません。

ふられた。
学校の廊下で、告白した私は、その場で。
先輩の一言は簡潔で「君とは付き合えないんだ」
田舎の雪国、冬。
私の内に宿った恋心は、窓ガラスの外で雪が降りしきる日に殺された。

友達は慰めてくれて、女同士で私たちは帰り道を辿った。
道中はすでに彼の悪口になっていて、二人して大笑いだった。

後日、と言っても三日後に彼から付き合ってくれと言われた。
私は大笑いして
「なぁに？私はあなたにとって都合のいい女とでも思ったのかしら！女を、なめてんじゃねぇぞ！」
叩きつけるように言ってやったのだ。
悔しそうに、顔を赤くして彼は逃げていった。

また三日後。
上級生に囲まれた。
どうやら私が一時でもほれた男は屑だったようだ。
さて、どうしようか

「おまえら、なにしてる」

先生、ありがとう。

その日の午後、私は先生に恋をした。
ふられた。

まぁ、妻子持ちだしね。
もう友達は慰めてくれなかったし、私を理解してたみたい。
一人で家に帰った。

寒い、寒い、と言いながら家に帰り、着替えを済ませてコタツに入る。
家の窓ガラスは冷え切っていて、外に振る雪の冷たさを運んできそうだ。
寒い寒い、と言いながらコタツで私はアイスを食べる。

なんていうことは無い。
寒いから暖かさがほしいのだ。
だから私は惚れっぽいのだ。

と言いながらアイスを食べる私は、やはりただの冷たい我儘娘なのだ。

父親を使いつぶして、夢のように消えて逃げた母親の血を引く、冷たい我儘女なのだ。

クスクス笑いながら、ＴＶを見つつアイスを食べる。

さて、そろそろ父親が帰ってくる。

この冷たい我儘を力で抑えてむさぼる悪魔が帰ってくる。

せめて暖かいものの振りをしなければ。

あれは、まだ使えるもの

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8638l/

三題話「"ガラス","雪","アイス"」

2010年10月20日09時37分発行